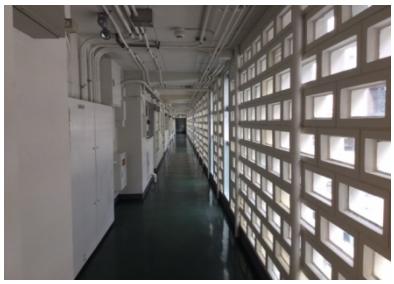
大阪「マンモスアパート」

3 枚の写真は今年 4 月、朝早く大阪市立中央図書館に行った時に撮ったものだ。図書館近くの「西長堀アパート」の「今」を知りたかった。古さのなかに、新しさを感じさせるＵＲであった。



アパートに立ち寄ったこともあり、朝日新聞 6 月 8 日「進むか　団地大改修」に注目した。

大阪・ミナミの繁華街に近い北堀江の「西長堀アパート」（地上 11 階建て、全 263 戸）は、1958 年(昭和 33)年に建てられた。当時の「都市型高層住宅」の代表格で、全室賃貸で貸し出し当初、2ＤＫの家賃が月額 1 万 6500 円。大卒初任給の 1．4 倍だった。

真鍮のドアノブやタイル張りの浴室などモダンな内装に和の暮らしも折衷。畳部屋もあり、押し入れに着物用の引き出し、浴室にひのきの浴槽が置かれた。著名人にも愛された。作家の司馬遼太郎さんはここで「竜馬がゆく」の新聞連載を始めた。その隣室には、野球評論家の野村克也さんが住んだ。プロ野球南海ホークスの主力選手だった当時に結婚し、61 年ごろに入居した。「決め手はやはり豪華さ、高級感だった」と話す。

だが、建設から半世紀以上が経ち住民は高齢化、建物自体の老朽化も進んだ。ＵＲは 2014 年、約 6 億円をかけて耐震工事を開始。壁やバルコニーの修繕のほか、部屋もリノベーション。障子の枠や陶器の洗面台、玄関の牛乳瓶受けはあえて残す一方で、今の暮らしにあわせてひのき風呂やふすまを取り払った。賃料はワンルームタイプが月額約 6 万 3 千円、1ＬＤＫが約 8 万 3 千円。今年 2 月までに 24 戸のリノベを終えた。最寄りの地下鉄駅から徒歩 1 分という好立地もあり、同月末に行われた抽選は、3．5 倍の高倍率となった。20〜30 代の応募者も多かった。

その威容から「マンモスアパート」と形容される同アパートだが、しょうゆを貸し借りするような昔ながらの近所付き合いも残る。自治会の菅野道夫会長は「住人の中心は 70 代。若い人にどんどん住んでもらって、再び活気ある団地になってほしい」と期待する。

（2016 年 6 月 12 日）